

美容院

2024.9.27

同じ理容店に、ずっと何年か通っていた。ネットで予約ができるのが魅力だった。家からも近かった。ずっと同じ担当の方に、髪を切ってもらっていた。当たり前なのだが、「今回は、どうしますか」のようなことを聞かれる。これが困る。考えがまとまっているときと、そうではないときがある。決まっているときは、それを伝えればよい。決まっていないときは、担当の方が言うてくれることに、ついつい従ってしまう。向こうも、このような主体性のないお客さんには慣れているのだろう。

ふとしたことから、店をかえてみた。ネットで、よさそうなところを探した。そこは、美容院だった。美容院には、もう何年も行ってない。若い女性ばかりだろうな。多少、緊張しながら店に入る。すぐに、これならば大丈夫そうだと感じた。とりあえず安心した。1回目は無事に終わった。

特段、問題もなかったため、同じお店に続けて行くことにした。担当の方を指名はしなかった。たまたまだろうか、2回目、3回目と同じ方だった。指名しなくても、このまま同じ方でいくのかと思っていた。ところが、4回目は担当の方がかわった。なぜ指名しないのか。担当の方がかわったほうが、何かとおもしろそうだからである。

担当の方によって、カットの仕方がけっこう違う。よくはわからないが、どの方も学んできた基本的な技術は同じなのだろう。あとは、経験とともに、自分のスタイルをつくりながら腕を磨いていくのだろうか。基礎は同じでも、自分なりのものをつくり上げていくことが、美容師の大事な要素となるのだろうか。いろいろと聞いてみたいが、聞けない。

「雑誌を読みますか」反射的に「ハイ」と答えた。すると、タブレットを渡された。一瞬戸惑った。「ああ、そういうことか」と、すぐに理解できた。そのタブレットには、実に多くの雑誌が入っていた。これは便利である。普段、雑誌など読まない。どれにするか。知っているタイトルが目に入った。「PRESIDENT」これにした。

同じことをスマホでやろうとすると、文字が小さい。拡大したとしてもどうだろう。タブレットならば、読みやすい。おかげで、いい経験ができた。学校では、生徒たちがタブレットを使いこなしている。自分はどうと、生徒のタブレット用に「校長室だより～燦燦～」をアップするときと、オンライン会議などに参加するときぐらいしか使っていなかった。時代に取り残されてきた。担当の方が、雑誌としてタブレットを渡したということは、こちらが使えることを前提としているということである。「紙の雑誌はありますか」と言わなくてよかった。

次も担当の方がかわるかもしれない。また何かしらの刺激がもらえるかもしれない。それが楽しみである。